

## 特集 地域の水を再考する

## 緒言

籠橋 一輝

本特集は、「水」と「地域」のつながりを再考し、両者の間にどのような関係性を構築していくべきかを論じることを主な目的としている。なぜいま、水と地域のつながりに注目するのか。水は言うまでもなく、私たちの経済や暮らしに不可欠な資源であるとともに、豊かな生態系を形づくる上で重要な役割を果たしている。「21世紀は水をめぐる争いの世紀となるだろう」というのは1995年に世界銀行の副総裁であったイスマル・セラゲルディン氏の言葉であるが、地球上の多くの国際河川—アフリカや中東、アジアなどで水紛争が生じている。その背景には、各国が都市化と経済成長を推し進める中で水需要が増大し、水の希少性が高まっていることが挙げられる。また、経済のグローバル化と自由貿易の進行とともに、各国間での農作物や工業製品の輸出入を通じて、バーチャル・ウォーター（仮想水）のやりとりも活発になっている<sup>(1)</sup>。このようなマクロレベルでの流れがある一方で、途上国では世界銀行や国家、企業が中心となって、安全な水供給を行うための上水道設備や、感染症を防止するための衛生設備の導入が進められている。日本でも戦後、上水道や下水道の整備が進み、良質で安価な水道水を利用できるようになった。近代的なインフラの普及や水資源開発等によって私たちは便利な生活を享受してきたが、その代償として、中小河川やため池、井戸・水場等、私たちの生活と一体となって利用されてきた多くの「地域の水」を失ってきている。蛇口をひねれば水が自由に使えるようになった現代の日本に生きる私たちにとって、水との関わりを実感する機会はきわめて乏しくなっているように思われる。

私たちが地域の水との関わりを失っていったことで、水の地域固有性は薄れていき、土地と水が分離されていった。その結果、水は数多ある経済財のうちの一つとして認識されるようになったと考えられる<sup>(2)</sup>。しかし、水はその量と質の両面で人間の健康や衛生状態に大きな影響

---

(1) バーチャル・ウォーターは各国の農作物や工業製品の生産過程で消費された水資源量を表す概念であり、貿易における各国間の水資源のやりとりを記述することができる。各国のバーチャル・ウォーターの取引量の推計に関しては、既に多くの研究蓄積がある(例えば、Hanasaki et al. (2010)、Hoekstra and Chapagain (2007)、Oki and Kanai (2006)、佐藤・中山 (2014) を参照)。

(2) 水が経済財（希少性を持つ財）として認識されること自体には問題はない。社会におけるすべての経済

を与えるだけでなく、生態系の維持にも不可欠な役割を果たしている。また食料生産という観点からも、渇水等の不測の事態が生じた場合の損害はきわめて大きい。このような点で、水は他の財とは異なる物理的性質を有しており、その利用が阻害された場合に生じる損失の大きさや不可逆性を考えると、できるだけ単一の水源に依存せず、多様な水源から水を利用できる状態をつくっていくことが不可欠となる。別の言葉で表現すれば、水はその物理的な不可欠性から、社会的レジリエンス<sup>(3)</sup> (social resilience) の高い条件下で利用・管理していくことが求められる。このような全体像の中で、私たちの暮らしを「地域の水」という観点からもう一度見つめ直し、水と地域のあるべき関係性について考察したいというのが、本特集の基本的な問題意識である。

本特集は、全部で3本の論考を収録している。まず、藤本穰彦氏による論考「近代河川行政の成立と水利権—「川」と「水」のマネジメントに関する基礎的考察」は、近代河川行政の成立過程を吟味し、河川法や水利権の規定に立ち返りながら、水の利用・管理のあり方について考察を行い、近代の河川行政や技術が住民不在のまま進められてきたことを指摘している。この点で、本論文は河川や水の利用・管理において地域住民がどのような役割を果たすべきかを考える上での出発点となる。次に、籠橋一輝の論考「水資源開発が地域の水利用・管理に与える影響—讃岐平野における香川用水事業を事例として」は、日本の戦後の水資源開発がもたらした弊害について検討するとともに、広域的な水供給インフラの整備が地域の水利用・管理に与えた影響について、香川県讃岐平野の事例を基に考察している。本論文は、いわば人工資本が自然資本の利用・管理制度に与えた影響に焦点を当てている。最後に、大野智彦氏による論考「ダム撤去を通じて地域と河川の関係性を再考する—荒瀬ダム撤去の政策過程と社会的影響の解明に向けて」は、日本で初めてのダム撤去例である熊本県球磨川流域の荒瀬ダムを対象として、その撤去に至るまでの政策的意思決定プロセスと、ダム撤去が球磨川や地域住民にもたらした(現時点での)変化について丹念に検証している。ダム建設は河川の状態や地域の水利用・管理を変化させるが、同時に「地域」と「水」との関係性にも大きな影響を与える。そのように考えれば、ダム撤去は単に水インフラを川から除去するという物理的な意味を超えて、地域住民と川との関係性を変化させる働きを持つはずである。今後、ダム撤去が日本の河川行政の

---

主体の水需要を十分にまかなうことができるだけの水供給が得られていた時代には水は自由財として何の対価も支払うことなく利用することができたかもしれないが、現代において水は希少性を持つことは明白である。ここで問題としていることは水が持つ物理的な特質であり、他の商品や財・サービスとの同質性を安易に前提することには慎重な立場をとるべきではないかということである。

- (3) 社会的レジリエンスは生態学において1970年代に提唱された生物種間のダイナミックな相互作用を捉えるレジリエンス概念 (Holling 1973) を社会の次元で考えようとするものであり、「ある集団やコミュニティが、社会・政治・環境の変化によって生じる外的なストレスや攪乱に対処することのできる能力」(Adger 2000) と定義される。本特集では社会的レジリエンス概念を明示的に扱うことは意図していないが、水と地域との関係を再考する際の理論的指針として本概念を位置づけることが可能である。

中でどのように位置づけられていくかを見守っていく必要があるが、「地域の水」として河川を位置づけなおすための一つの方策としてダム撤去を考えることができるかもしれない。

「地域の水を再考する」ということは結局、私たちの暮らしのあり方を見つめ直すことに他ならない。それは富山和子の『水と緑と土—伝統を捨てた社会の行方』の次の一節に端的に表れている。

「私はこの国土で行われてきた破壊の事業のあとをたどりながら、そのどこに誤算があり、誤算はどのようにして生まれたか、その秘密を探って行きたいと思う。おそらく、その鍵は川にかくされているはずである。というのも、当面するどのような問題—都市の緑の後退、水不足、災害、危機に瀕した農業や林業、汚染、山の破壊など、資源、環境、災害のどの側面からアプローチしても、結局のところ私が行きついたのは水のとらえかたであり、川とのかかわりかたの問題だったからである。」(富山 1974, p. 8)

本特集も富山和子の問題意識と軌を一にしている。本特集が「地域の水」を再考するきっかけとなり、ひいては現代の環境問題を考える上での新たな気づきを読者の方々に提供することができれば幸いである。

#### 引用文献

- Adger, N. (2000) . Social and ecological resilience: are they related? *Progress in Human Geography*, 24 (3) , 347-64.
- Hanasaki, N., Inuzuka, T., Kanae, S., & Oki, T. (2010) . An estimation of global virtual water flow and sources of water withdrawal for major crops and livestock products using a global hydrological model. *Green-Blue Water Initiative (GBI)* , 384 (3-4) , 232-244.
- Hoekstra, A. Y., & Chapagain, A. K. (2007) . Water footprints of nations: water use by people as a function of their consumption pattern. In E. Craswell, M. Bonell, D. Bossio, & S. Demuth (Eds.) , *Integrated assessment of water resources and global change* (pp. 35-48) . Springer.
- Holling, C. S. (1973) . Resilience and Stability of Ecological Systems. *Annual Review of Ecology and Systematics*, 4, 1-23.
- Oki, T., & Kanae, S. (2006) . Global hydrological cycles and world water resources. *Science*, 313 (5790) , 1068-72.
- 佐藤正弘・中山紘史 (2014) . 「多地域間産業連関 (MRIO) モデルを用いたバーチャル・ウォーターとバーチャル・ランドの推計」, *KIER Discussion Paper Series*, No. 1405.
- 富山和子 (1974) . 『水と緑と土：伝統を捨てた社会の行方 (中公新書348)』, 中央公論社 .